

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.  
-----

共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る (1)：文法の多重性と分散性」

2019 年度第 3 回研究会

日時：2020 年 2 月 1 日 (土) 13:00-18:00

場所：東京外国語大学 AA 研 3 階 マルチメディア会議室 (304 号室)

報告者名 (所属)：

- 1) 吉川正人 (慶應義塾大学) 「ホモ・レギュラリス: 規則に取りつかれた人類の生み出す文法という幻想」
- 2) 中山俊秀 (AA 研) 「言語コミュニケーションにおける言語の役割と言語使用の機能性を考える」

研究会の内容

1) 吉川正人「ホモ・レギュラリス: 規則に取りつかれた人類の生み出す文法という幻想」  
従来の文法研究においては、言語使用行動に観察される規則性を基盤にそれを生み出す規則体系の存在を前提として論を展開してきた。この発表では、規則性が観察されることから規則の実在を確認することはできないことを指摘した上で、その規則性がそれを生み出す別のメカニズム (創発現象と人間の持つ認知バイアス) によって説明できることを示す。

2) 中山俊秀「言語コミュニケーションにおける言語の役割と言語使用の機能性を考える」  
文法の機能的考察や用法基盤的考察では言語コミュニケーションの中での言語使用の実態に基づいて文法体系の形成やありようについて説明を与えようとする。その時に、文法研究者はコミュニケーションにおける文法システムの役割を過大評価し (コミュニケーションは言語コード・文法知識の共有・一致があってはじめて成立する)、言語使用の機能性を最大限に捉える (言語コミュニケーションは正確な意味のやり取りで言語表現がその意味伝達を保証している) 傾向が強い。少なくとも、言語データの分析にあたってはそのような前提のもとに意味・機能を解釈しているようである。この発表では、その前提がコミュニケーションの実態に合わないものであることを指摘する。